
鉾山研究会

ニューズレター No. 84

2011年4月4日

- 1 鉾山研究会の総会・研究大会のお知らせ
- 2 大原社会問題研究所主催・シンポジュームの報告
- 3 第28回鉾山の映像を観る会のご案内 丸山もとこ
- 4 海外鉾山文献読書会のご案内 丸山もとこ
- 5 産業考古学会2010年の報告 山田大隆
- 6 第3回日本の鉾山展の報告 川俣修壽
- 7 鉾山研究会の忘年会の報告
- 8 速報 災害地釜石に緊急物資を届けて 小野崎敏
- 9 事務局からのお知らせ

鉾山研究会 連絡先

会長 村串仁三郎

〒270-0127 流山市富士見台2-5-16-13-401

電話・ファックス 0471-52-8952

事務所 国学院大学、若木タワー第913号、菅井益郎研究室

〒150-0011 渋谷区東4-10-28

1 鉱山研究会の研究大会・総会のお知らせ

日程 2011年4月23日(土) 午後1-5時

場所 法政大学市ヶ谷キャンパス、80年館7階丸会議室

I部 研究大会

近代新潟県の油田開発—西山油田の事例を中心に— 品田光春
産業革命以降同「銅?」製錬が自然環境と社会にもたらした
影響と現代的課題 島崎光清

自著『近代日本における鉱物資源開発の展開
—その地域的背景を語る—』

原田洋一郎

中国炭鉱訪問の記録

寺本孝広

注

地震のため法政大学の市谷キャンパスが被害が生じ、会場の使用が危ぶまれていましたが、何とか使えることになりました。

II部 総会

2010年度活動報告

村串仁三郎

昨年度の活動は、まず特記できるのは、7月におこなわれた釜石鉱山遺蹟見学会であった。詳しくはニューズレター前々号に報告してあるので、繰り返さないが、久しぶりの盛会であった。



その他の活動は、ほぼ例年並で、特記すべきものはないが、定例の研究を3回(1回は釜石見学会)、ニューズレターの発行を4回、会誌の発行1回、ハガキニュース1回、つつがなくおこなわれた。

橋本康夫氏の逝去で、鉱山の映像を観る会は、丸山会員の肝煎りで今年も

3回開催、同じく丸山会員の海外鉱山文献読書会も3回開催された。村田会員ひきいる恒例の伊豆鉱山巡検もおこなわれた。

新体制発足から5年たったが、5年間を簡単に総括してみます。死に体にあった研究会の存廃の決断を迫られ、会員のみなさんからのほそぼそでも研究会を維持せよとの声援に後押しされて、何とか今日まで、ほそぼそと研究会を維持してきた。

会員の退会は、研究会の停滞を反映して、2006年から2008年にかけて8名、2010年に2名があり、長期未納者の除籍が4名であった。

他方、新会員の加入は、2006年に1名、2007年に2名、2008年に1名、2010—11年に、橋本夫人、品田、友澤、小西、井上、田川市石炭・歴史博物館の7名、計11名でした。ほそぼそと会員の拡大があった。

鉱山研究会のホームページの存続についてもいろいろ議論があったが、わがホームページをご覧になっている不特定多数の方がいることも事実であり、ときどき私への問い合わせがある。先日のチリの坑内落盤の時も、ホームページをみて、マスコミ3社から私への取材があった。

『鉱山研究』の発行も研究会の実績を認められ、手続き的には川俣会員の配慮で、国会図書館のサイトで近刊のものについてはすべての論文が公開され、読めるようになっている。先に草津温泉のヒ素の存在を論じた川俣論文が、話題になり、大騒ぎとなった。

わが『鉱山研究』誌の社会的価値は、他の研究会にはみられない、たいへん大きなものがあると感じられる。

私情であるが、研究会のほそぼそ存続を選択してよかったと思っている。私の希望としては、私がこける前に、新たに研究会の中心人物が出てくれることですが、今は見通しがまったくありません。それでも小生齢75になったが、あと5年くらいは生きながらえそうである。

今後も皆さん方と研究会をほそぼそ維持に励みたいと願っています。

なお会運営の最終段階で、会誌第88号の印刷費が、予算の25万円をはるかに超えて499、984円となり、膨大な赤字を計上することになった。これについては、来年度の方針のところで論じる。

2011年度活動方針案

村串仁三郎

今年もルーティン活動をほそぼそ続けていくことが方針である。ことさら述べることはない。

しかし活動報告に触れたように、ある程度赤字は予測していましたが、会誌第88号の投稿者が多く、ページ数も前号の49頁のほぼ倍の96頁となり、前号の印刷費278、017円の倍弱となってしまった。

投稿者が多かったことは研究会としては大変嬉しいことでありましたが、やはり編集のあり方としては大きな問題であった。この赤字をどうするかについては、三つの処理方法が考られる。

1案は、2011年度の会費予算65名×4000円＝260、000円から赤字を補填し、2011年度の会誌は投稿者を厳選し、20頁程度の薄い会誌を発行する。

2案は、2010年度会誌は、力量を超えたとみなし、2011年度の会誌の発行を休む。3案は、赤字をカンパによってうめ、従来どおり会を発行する。最終的には私の寄付で帳尻を合わせる。

会長の提案としては、第1案に、3案を補足する、というものにしたい。

会計報告（暫定報告、2011年4月3日現在） 久保 敦子

2010年度決算報告案

収入

会費（4000円×60名、他誌代）	290、000円
会誌第88号販売代金	43、600円
雑収入	1、400円
合計	335、000円

支出

会誌第88号印刷費	447、300円
郵送・通信費	39、369円
映像の会（会場費）	12、000円
ホームページサーバー代金	5、315円
交通費	6、000円
合計	499、984円

収支決算

収入335、000円マイナス499、984円＝164、984円

今年度は、会誌第88号印刷費499、984円の支出増となり、大赤字ということになりました。予算については、総会当日に提起します。

その他の問題・規約改正についての提案

これまで規約の実質的な改正、会名、会費の変更があったので、改めて会則の改正、確認を提案する。

鉱山研究会会則改正案

1. [名称]

本会は鉱山研究会（金属鉱山研究会を改め）と称す。

2. [目的および事業]

（１）本会は鉱山・炭鉱（金属鉱山を削除し炭鉱を附加）に関する事柄に関心を抱く会員によって構成し、会員の研究活動と会員相互の交流に貢献することを目的とする。

（２）本会の目的を達成するために以下の事業を行う。

a.研究会（年４回程度）合宿研究会、研究大会の開催

b.会報その他の刊行物の発行

c.そのほか本会の目的を達成するために必要な事業

3. [総会]

本会は年１回総会を開催し、以下のことを決定する。

（１）会長、運営委員、会計、会計監査などの役員の選出

（２）年度の基本方針及び長期計画

（３）予算と決算の報告および承認

（４）そのほか必要と認められる事項

4. [運営委員会]

本会の運営は総会の決定に基き、おもに役員（会計監査を除き）によって構成する運営委員会によって行なう。

5. [会費]

会費は正会員を年４０００円（７０００円を改め３０００円とし昨年４０００円に改正）とする。

6. [事務所]

事務所は運営委員会の定める所に置く。

本会の規約は、１年前に溯って有効とする（追加）。

２０１１年４月２３日

2 大原社会問題研究所主催・シンポジュームの報告

２０１０年１０月２３日（土）

法政大学市ヶ谷キャンパス、外濠校舎 S306 教室

時間；13.00～17.00

報告1 平井陽一（明治大学教授）「三池争議とは」

報告2 石河康国（労農派研究家）「向坂逸郎にとっての三池」

コメンテーター兵頭淳史専修大学准教授

なお平井氏は（三池争議研究の第一人者で『三池争議—戦後労働運動の分水嶺』（2000年、ミネルバ書房）の著書がある。）、鉱山研究会の会員でもあり、このシンポを鉱山研究会の研究会として位置づけたため、鉱山研究会から多くの会員が参加していました。

参加者の感想（1）

川俣修壽

大原社会問題研究所の記念シンポジウムなので、五十嵐仁所長の挨拶ではじまったが、同氏は講演者の平井会員の事などお構いなく、「三池争議」に関する自説を長々と展開した。それは、平井会員が予定していた内容のダイジェストの様だった。

平井会員は、「争議の概略」「何をめぐって争われたのか」「争議にいたる経緯—職場闘争の形成過程」「争議の画期」「三池争議が残したもの」の5つパートに分けて話したが、請負労働の詳しい説明はなかった。

私の判断では、エネルギー転換等と同様、会場に集まった人々が当然知っているべき基本的知識だと平井会員は考えていたようだ。所が、パネル討論でコメントを担当した兵頭淳史専修大学准教授が「請負労働」に全く理解がなく、そのため、議論はかみ合わず中途半端に終わった。

兵頭氏は、当時の炭鉱労働の仕組みを現在の工場労働と同様視しているようで、明らか、人選を間違えたシンポジウムだった。

平井会員は、五十嵐氏に出鼻をくじかれ、兵頭氏の思わぬ無理解に出会って話の焦点を絞れなかったようだ。議論を聞いた若い人は、「昔は良かった。今は労働争議どころか、契約が切れれば次ぎの日からホームレスだ」と思ったことだろう。すなわち、現代性が意識されなかったシンポジウムだった。

参加者の感想（2）

竹村恒彦

昨年10月23日、三池争議50周年記念事業として「三池争議と向坂逸郎」シンポジウムが開催され参加の機会を得た。当会会員で三池争議研究の御著書もあり第一人者の平井先生が基調報告を担当され、ほかに労農派研究家石河氏の三池に於ける向坂逸郎の実像報告もあり、後の質疑応答も含め、その興味

深い内容にほぼ満員の会場は、時ならぬ熱気に包まれた。

平井先生の三池争議に関する概要説明は御著書・研究内容を敷衍するものであり、新たに三池争議に触れる参加者にとって理解しやすく、問題点の整理された内容であった。争議の根幹は労働者主体の生産秩序確立に収斂され、「輪番制・生産コントロール」維持が最大の争点と論じられた。挿話として演習在籍の学生が、(資本・労働双方にとって)効率的とも取れる「輪番制」の普遍的に採用されない事への疑問を提示していた事を挙げ、ご自身も感慨を新たにすると述懐されたのが印象的であった。

石河氏の報告は三池争議に当たり、その指導姿勢に毀誉褒貶の存在する「向坂教室」の実像について巷間伝えられる「革命の日は近し」的な印象より、民主主義に立脚した労使関係の具現化を模索する先進的な労働学校であり、闘争経過自体と向坂の存在(言質)をある程度区分する事の必要を説いておられた。

質疑応答も非常に活発であったが、全体を通じて炭鉱(鉱山労働)の生産機構・労働過程への理解不足が散見されたのが残念であった(研究者含む)。三池争議研究は特に生産現場に於ける「職場闘争」の位置付け・成立過程を丹念に精査する必要がある(争議離脱した北三連傘下の三井美唄に於いても職場闘争は当初先鋭的で、実質上がり山・生産体制も異なるとは言え労使関係と職場における民主化の動向は歩みを共にする)、この点期待に反して論議の俎上に成らなかった事は、平井先生が参加させていただきに惜しいと感じた。また質疑で「輪番制」を今日の「ワークシェアリング」との関連性を論議するに当たっては、論者の坑内直接員請負賃金制への理解不足もあって、平井先生より炭鉱賃金構造の概略説明が為される等、カレントなアプローチ、研究領域の問題が存在する事は理解できるが、更なる十分な生産構造・労働過程の把握、従来資料の検証・咀嚼が重要であって、現在の問題を照射するに際しても、「炭鉱労働」の正確な理解が不可欠であることを感じた。その意味に於いて村串会長始め、当会参加者の忸怩たる思いが存在する様であり、また石川会員の釧路に於ける取り組み等は一層精彩を際立たせる試みであろう事を後に感じた。

3 第28回鉱山の映像を観る会のご案内 丸山もとこ

通称“映像の会”は、2004年に故橋本康夫会員の呼びかけによって始まりました。以来年に3~4回のペースで開催しています。鉱山の歴史と現状を学び、映像記録のあり方を考えることを目的としています。

次回は5月下旬を予定しています。日時とテーマが決まりましたら、鉱山

研究会のウェブサイト、ニューズレター、ハガキ通信等でお知らせします。
しばらくお待ちください。

※映像の会についてご意見ご要望のある方、鉱山の貴重な映像資料をお持ちの方、所在をご存知の方は、〈jmrs.eizonokai@gmail.com〉までお知らせください。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

4 海外鉱山文献読書会のご案内

丸山もとこ

近年、国際会議に出席したり、海外の鉱山を見学する機会が増えています。

そこで、英語で著された鉱山文献を読み解く勉強会を月一回のペースで行っています。文献を通して海外の鉱山史と鉱山事情を学ぶほか、英語の専門用語に慣れることを目的としています。この勉強は海外で活動するうえで欠かせません。英語が苦手という方こそ奮ってご参加下さい。

【テキスト】Spence, Clark C. *Mining Engineers and the American West: The Lace-Boot Brigade, 1849-1933*. 1970. Reprint. Moscow, Idaho: University of Idaho Press, 1993. 次回は p.254 から

【次回】2011年3月23日（水）15:00～17:00

【会場】GIO オーガニックカフェ（港区港南 1-9-36 アレア品川 2F）

【会費】なし ただしテキストは自分で用意してください

※参加希望者は事前に〈jmrs.dokushokai@gmail.com〉までご連絡下さい。

5 産業考古学会2010年度全国大会（江別市）の報告 実行委員長山田大隆（酪農学園大学）

2010年度の産業考古学会全国大会が江別市の酪農学園大学他で、10月9～12日に開催された。北海道開催は97年に続いて4回目である。参加者数は1日目（9日酪農大学）60名、2日目（10日見学会、江別市、三笠市、上富良野町）30名、3日目（11日オプション見学会1、北大、小樽市、倶知安町、喜茂別町）16名、4日目（12日オプション見学会1、室蘭市）14名であった。1日目は午前中は酪農学園大学の第1会議室で研究発表（9件、道内2、道外6、台湾1）、午後は中央館講堂で記念講演（高井宗宏氏「北海道開拓と営農機械化体系の変遷」、特別講演（石垣秀人氏「江別市の歴史と産業遺産」）、シンポジウム「日本の産業遺産保存運動の現状と課題」（パネリスト、林恒子、森陵一、中川一朗、青木隆夫、コメンテ

ーター大島聡範、司会山田大隆）、懇親会（新札幌アークシティ30名）、2日目は午前中は江別市の産業遺産（石垣説明、レンガ、酪農、木製戦闘機、河川交通史）、三笠市炭鉱遺産（伊佐治解説、幌内、奔別炭鉱立て坑）、上富良野町スガノ農機「土の館」（小野寺解説、トラクター史）、3日目は北大第2農場高井解説、小樽市港湾史、喜茂別澱粉水車、倶知安ニセコ実験機体）、4日目は室蘭市工場見学（日鋼室蘭、新日鉄室蘭）で、天候に恵まれ印象的な会議と見学会だった。

なお、鉱山研究会の長渡隆一会員が、大会実行会委員として大会の受け付けと見学会の旗持ちをおこなった。

6 第3回日本の鉱山展の報告

川俣 修壽

2月9日から2月14日まで、東京都品川区区民ギャラリーで遠田義則会員の上記展覧会が開かれました。足尾を中心とする鉱山施設の写真と鉱石の展示で、故橋本康夫会員の写真も展示されました。

古い写真や坑道図などが紹介され、元気だった頃の鉱山を忍ばせるモノが沢山ありました。

7 鉱山研究会の忘年会の報告

2010年11月27日に事務局の呼び掛けで、市ヶ谷駅近くの赤提灯「さくら水産」で5時から恒例になった忘年会が開催された。島崎（光）、長渡、中山、遠田、杉本、小野崎、橋本（邦）、久保、川俣、村串、村田（弘）、の各氏が参会し、盛会のうちに、忘年をはたした。来年の活動への期待もささやかれた。

8 速報・災害地釜石に緊急物資を届けて

小野崎 敏

国際協力NGO・財団法人ケア・インターナショナル・ジャパンのよびかけで、急拠会社OB会も協力することとなり、緊急支援隊に参加した。

よびかけのキーマンは加藤康子さんである。康子さんは、ご存じのように鉱山産業遺産の保存・顕彰に熱心な人である。九州山口の近代化遺産群の世界遺産登録推進の中心的人物であり、釜石の製鉄遺産もその中に入っている。

(財) ケアーの援助支援は開発途上国が中心であり、日本での支援ははじめての事であるが、外務省の了解も得て、今回の東北関東地震災害に対して実施することとなった。

康子さんの力で、その緊急支援の重点地区として釜石がえられ、緊急輸送の許可証もとれ、協賛者の一つに日鉄鉱業OB会も加わり、集荷・搬送に協力した。

私は関係者の一人として、現役時代の人脈を頼り、トラック・ガソリンの手配に協力した。二日間の準備・手配は大変だった。6 tトラック満杯の米、果物、菓子、紙おむつ、マスクなど釜石市長の要請をうけた物資を、ケアーと康子さんの力であつめ、康子さん、ケアー関係者とともに同行し夜行で現地入りした。高速道路は異常な制限と静寂だった。

三月十七日午後東京・出発・夜半に北上着。十八日釜石に入る。同日夕方釜石を離れ十九日夕方帰京した。釜石市街の惨状は、TV映像のとおりである。驚愕で言葉も出なかった。荷物をシープラザのセンターに届けた後に、市の菊池課長の案内で視察することができた。昨年鉱山研究会で昼食をした宝来館の一階は全滅、夕食会場の魚亭は全滅、ホテルサンルートは二階まで被害をうけていた。

市長・副市長・教育長は健在だったが疲労困ぱいで声をかけるのが精一杯であった。津波は釜石駅付近まで到来していたが、大島高任の碑は無事であった。製鉄所を外から見て津波が侵入して被害大であったが火力発電用の石炭ヤードの石炭がそのまま残っているのが異様に感じた。

多忙の製鉄所長にも挨拶に出向いたが、復興の工事準備の人達があふれ指示と整理で大変の状況にあった。製鉄所あつての釜石であり早期の復旧をのぞむものである。

鉱山は山手にあるので津波被害は受けていないが、地下の被害は調査済みではないが、秘水の水源はOK。工場は二十二日から再開するとのこと。残念ながら地下水力発電用の空洞は崩落があり取入口が防がれて発電不可とのことであった。水の需要が多いが停電とボトルなどの原材料が入らず操業に限界があるようだ。

鉱山の従業員は全員無事であったが、家を流出したり、家族が行方不明の人もあり言葉のかけようもなかったが、個人的支援物資も若干運び込み、被災見舞いができた。

私が在任時代に釜石ロータリー会員として、市の有力者達と交わっていたが、彼らの工場・店・家は全滅であり、生死の消息も不明で今回は見舞うこともで

きなかった。帰京後の新聞の死亡欄の中に二人の名前を発見し心が凍った。

釜石がんばれ、スクラム釜石をスローガンに、東北再建の希望の町となるよう今後とも支援を続けたいし、釜石はそれができる町であると信じている。鉾山研究会でお世話になった。市関係者はご無事で、森一欣さんも健在であり、森さんとは市内巡視中に、彼のほうから声をかけられ偶然出会うことができた。

鉾山研究会の皆様と、その再生釜石をまた一緒に訪れたいものだ。
今度の研究会で現状の写真等で報告する機会を持ちたいし、是非会員皆様の支援のキャンパもお願いしたいとおもう。（3月25日）

9 事務局からのお知らせ

2010年度の新会員の紹介

小西信義（北海道大学大学院生）

井上博登（早稲田大学大学院生）

田川市炭鉾・歴史博物館（館長安蘇龍生）

2011年度からの退会者の報告

二村一夫

川田敏文

研究会創設以来の有力会員であった二村さんから退会の届けが提出された。これまで、何回か退会の意思を伝えらたが、その都度、説得して会に止まっていた。二村さんは、大病を克服して今も元気に活躍されているので、残念なことではあるが、事実を受け止めないわけにはいかない。二村さん、長い間、研究会に貢献を頂き有難う御座いました。（村串記）

原田会員の出版紹介

会員の原田洋一郎さんが、『近世日本における鉾物資源開発の展開』という著作を出版されました。宣伝のチラシを前号のニューズレターに同封しました。出版元の古今書院のはからいで、鉾山研究会員に2割引販売ということになりました。ぜひご購入をお願いします。

個人の購入が難しい場合は、出版事情のわるい昨今、学術書がすこしでも売れて欲しいので、大学図書館や公共図書館に購入を申し出るようお願いしたい。（村串記）

石川孝織会員（釧路市立博物館学芸員）から「ヤマの話を聞く会」記録集の発行と配布のお知らせ

釧路市立博物館「?炭鉱(ヤマ)のくらし・マチの記憶～『炭鉱文化』集積継承・交流促進事業」(平成 22 年度 文化庁 美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業採択)で実施した、「ヤマの話を聞く会」の記録集(冊子)が完成しました。

太平洋炭鉱・雄別炭鉱について、「聞く会」で計 3 回・延べ 5 名の炭鉱 O B にお話いただいた内容を収録しています(書き起こし)。

日本で唯一、釧路に炭鉱が残った理由を技術革新・労働と労使関係から検証し、また雄別炭鉱の新入社員のくらしと仕事、突然だった閉山(1970 年)の前後のできごとなど、経験者だから語れる多くのことを記録化することができました。

また、現在放送中の「ヤマに生きて」(FMくしろ・毎週金曜午後 3 時半?)でお話いただいた内容も 3 人についてあわせて収録しています。

この記録集(104 ページ)を、関係各所(図書館・学校・博物館など)に寄贈し、またご関心をお持ちの皆様にお配りいたします(無料／送料はご負担下さい)。

配布方法など、詳細は下記をご参照下さい。

配布開始 平成 23 年 3 月 26 日(土)午前 9 時 30 分の開館時間から。部数 600 部を予定 (無くなり次第、配布終了)

配布方法 ①来館：窓口でお渡しします(無料／開館時間内)

②郵送：下記に「送付先のメモ」と「送料 290 円分の切手」をお送りください

〒085-0822 釧路市春湖台 1-7 釧路市立博物館 炭鉱記録集 係

*目安として、3 月 26 日以降に届くように投函して下さい。

*ゆうメールで発送します。

*配布部数終了時には切手をお返しします。ご了承ください。

<記録集内容>

【ヤマの話を聞く会】

「海底下への挑戦・SD採炭の完成」 高崎 守(元 太平洋炭鉱 取締役釧路鉱業所次長)／「労使が語る太平洋炭鉱?緊張ある信頼関係?」

小西新蔵(元 太平洋炭鉱労組 執行委員長)・高崎 守／「我が青春の雄別炭鉱? 1965?1970?」 三輪紀元・松下泰夫(元 雄別炭鉱)

【FMくしろ「ヤマに生きて」】 畠等重房(元 太平洋炭鉱 技術課係長)／成田清一(同 選炭区長)／佐藤 富喜雄(同 総務課長) (敬称略)